〔2〕 生活一般における授業づくり

「生活者としての力をつける」ための中核にある学習形態が「生活一般」である。この「生活一般」は、基礎集団である「学習集団」を単位に「行事単元学習」とよぶ生活単元的な学習内容と「生活的教科学習」（社会科、理科、技術家庭科、保健体育科等）と呼ぶ生活的、実践的な教科学習の２本の柱からなる。

第一のねらいとしては、生活につながる経験や体験を繰り返し継続することにより、具体的な実践方法や問題解決の力を体得したり、健康管理・増進のための知識を身につけることである。また、学級集団の中で友だちと関わり、楽しんで行事に取り組み生き生きと活動する態度や意欲を育てることもねらう。

このねらいを達成するために、我々は次のような観点をあげ、生活一般での授業づくりの充実を試みた。

○互いを認め合う雰囲気の中で、自分の思いや考えを表現できる授業

自分の思いや考えが受容され、思いが成就する体験を通し、自分なりに表現しようという意欲を持たせることが大切である。生徒個々の表現方法や互いの障害を認め合いながら、具体的な課題や活動に即して自己表現する場を設定していきたい。

（教師の姿勢）

生徒一人ひとりが生き生きと活動し、お互いに認め合う雰囲気を作り、ある程度の方向性は示唆するが、決定は生徒にまかせる。活動する中で意図する方向へ修正していくように導いていきたい。

○社会生活を営むことを意識し、より具体的に実際的な活動の中で自分の課題が理解できるような授業

社会参加するために、個別に抱えている課題を自らが理解することが必要である。そのために、社会との関わりを意識できるような教材を組み、その取り組みの過程で自分の課題に気づかせるようにしたい。したがって、内容はより具体的、実際的で体験を重視したものにしていくことが大切である。また、繰り返し体験することで課題が明確になり、見通しが立ちやすくなる。それは活動への意欲を高め、社会参加への自信につながると考える。一方では、日常生活に必要な事柄や知識や行動様式そのものをある程度パターン化させて指導する場面でもありたい。

（教師の姿勢）

具体的なルールや方法については事前に把握させた上で、危険が及んだり他に迷惑がかからない限り、教師主導にならないように指示や声かけを少なくし、生徒の試行錯誤を大切にして待つ姿勢をとりたい。

このような授業づくりの観点を考慮して実践に取り組んだが、ここでは各学年の実践事例の中で、校外学習を含む社会との関わりを意識した実践事例を取り上げて次ページに紹介する。

― 共 同 研 究 ―　〈買い物学習における実践〉　～１年生の取り組み～

(1)　生徒の実態

本学級の生徒は、男子７名、女子４名、計11名である。障害は、脳水腫、てんかん、自閉的傾向、結節性硬化症、孔脳症と多種多様であるが、Ｓ－Ｍ社会生活能力検査では８才～12才とあまり大きな幅はない。指示理解は比較的良く、机上学習や作業に集中して取り組むことはある程度可能である。しかし、共感体験が少なく、周囲を意識して振る舞ったり、相手を気づかったりする意識に欠ける。また、経験不足のためか自信がなく、人前で自分の思いを分かりやすく伝えることが難しい。つまり生かし使えるコミュニケーションの力が未熟であり、卒業後、人間関係でつまづく可能性が大きいと考えられる。

(2)　ね　ら　い

社会の人と関わり、よりよい人間関係を作っていくために、高等部１年の段階では、まず「人前で相手に分かるように話すこと」を目指す。本学級の生徒は限定された場では自信を持って取り組み、簡単な事がらならば数回の経験で定着するという特性を持っている。そこで、社会との関わりが明確で複雑な手順を必要としない「買い物」であれば、前述の目標が達成できるのではないかと考えた。

買い物は、品物を選び代金を支払うといった比較的パターン化された活動である。人との関わりという点では、臨機応変に相手と対応してやりとりを進めることが少ない。また、やりとりとして成立しなくても、品物の置き場所を尋ねるなど、自分の伝えたいことを相手にわかるように話すことができればよい活動である。

このように、商品を媒介としたやりとりであるため、本学級の生徒たちでも自信を持って活動しやすいと考えた。さらに、現実の「社会」と触れ合うことにより、自分の「できること」「できないこと」が認識できる。自分の抱えている様々な課題を自分のこととして捉えられずにいる本学級の生徒たちにとって校外学習は課題認識をする上での良い学習場面となる。以上のような理由から、「買い物」を通してコミュニケーションの力の獲得と同時に障害認識の力を高めることができると考え、本単元を設定した。

(3)　指導方針と手だて

校外学習での実際の買い物と、それをもとに自分の課題に気づかせ、克服していこうとする意識を高める学習とを組み合わせながら、繰り返し継続的に行う。この時買い物が単なる楽しみや遊びとならないように、目的意識を持って学習に取り組ませる。そのため、購入する物は生活の中での必需品であったり、不足している物に限り、事前指導や事後指導でしっかり必要感を持たせるようにする。教室内での学習では、視聴覚教材やロールプレイを取り入れ、課題に気づきやすいようにする。自分で気づくことが難しい場合でも、友だちの意見を聞いたり友だちの課題を考える中で気づけば良いと考える。また、11名の生徒全員が学習に参加し、活動が保障できるように作業的な動きのある活動や意見交換の場を設定する。苦手とする話し合い活動を繰り返し経験させることにより、話すことに慣れさせ「相手に思いを伝えること」の大切さや必要感「伝わること」の楽しさや喜びを持たせたい。

○買い物学習の指導の流れ

事前	・買う目的　・買う物の決定 ・校外学習のきまり	毎回	・金銭出納帳のつけ方　・レシートの意味 ・金種の判別　・品物の品質表示の見方	随時 (11)

⇧　　⇩

校外学習	第１次　メモを見ながら買おう（宿泊学習の食事の材料） 第２次　決めた物をたくさんの中から選んで買おう（学級に必要な文房具、ドリルなど） 第３次　一定額内で２～３品組み合わせて買おう（調理実習の材料、日用品など） 第４次　必要な予算をたてて、自分で選んで買おう（下着、靴下など） (21)

⇧　　⇩

事前	・金銭出納帳の記入　・反省	毎回	・困ったときの解決方法　・課題点の把握	随時 (16)

※事後学習が次の校外学習の事前学習になる場合もある。

(4) 実践例「買い物学習を振り返ろう」

① ね ら い

・ビデオや話し合いを手がかりに、自分や友だちの問題点に気づく。

・できるだけ自分の考えを人に分かるように発表する。

② 指導方針と手だて

本学級の生徒は、自分の行動を振り返って考える習慣がない。従って問題となる行動を指摘された時は直そうとするが、一時的で長続きしない。つまり、自分の課題を認識し克服しようという意識が低いため、行動の改善が図られない。そこで振り返って考える場を意図的に設定し、自分の課題に気づかせたいと考えた。その手がかりとして、前回の買い物の様子のビデオを使用する。ビデオを使うとその場に立ち返りやすく、問題を自分のこととして捉える一助となると考える。視聴後話し合い、理解を深める。この時、全体では意見が出にくいので、小グループに分け意見交換がしやすいようにする。指導者は待ちの姿勢で臨みできるだけ教師主導とならないように留意する。

③ 学習の実際

学習の初めに「良かった点」「悪かった点」について簡単に扱った。やはり予想どおり、殆どの生徒が良かった点は言えても悪かった点には気づいていなかった。続いてビデオを視聴した。全員が興味深く見入っていたが、自分の姿が出てくると、恥ずかしさのためか目をそらしてしまう生徒が多かった。ワークシートを事前に渡し「あいさつの有無」「品物の選び方」「店の人との話し方」「返事の仕方」などの観点で見るよう指示し

話し合い風景

たが、自分の姿を客観的に見ることはできず、十分な反省が行えなかった。その後の話し合いでも意見が出にくかったため、一生徒の例を挙げて全体で話し合いを行った。その結果、再度ビデオ視聴をした後での話し合いでは意見が出やすくなり、友だちのことはもちろん、自分の問題点についても見つけられた生徒が出てきた。司会の生徒には「司会者マニュアルカード」という司会の手順を書いたカードを持たせ、話し合いがスムースに進行しやすいようにした。出された意見をカードの手順に従ってグループ全体へと広げることができ、自分の問題点に気づかなかった生徒も、話し合いの中で気づくことができたようである。しかし、教室内での知識的な学習であったためか、内容を把握するにとどまり、実践への意欲にまで高めることができなかった。また、友だちに問題点を指摘されるのみで、自分では全く気づけなかった生徒もおり真に課題を認識できたかどうかは明確でない。学習後の様子は次の通りである。

	学習前の実態	目　　標	学習後の様子
C子	・品物の置き場所を質問できない。 ・何を話しているのか聞きとれない。 ・挨拶ができない。	・分からない時はすぐに質問をする。 ・大きな声で話す。	大きな声を出すことはできないが品物の置き場所をすぐに質問できるようになり、買い物が短時間でできるようになった。相手の顔を見ないという問題点もある。
G男	・単語だけで質問をする。 ・店員が話しかけても返事をしない。	・語尾までしっかりと話す。 ・相手の話をよく聞いて返事をする。	語尾まで言うことは意識されだしたが、全体的に曖昧な表現や言い方が多い。返事は良くなった。

(5) 考察と今後の課題

本学級の生徒たちは、人と上手に話ができないことを気にもとめていなかった。従って、「相手に分かるように話す」ということを要求されるのは思いもかけないことだったようである。しかし、今まで何気なく行っていた買い物の仕方を振り返ったり、困った時の解決方法を考えたりする中で「人と話をすること」の大切さや「自分の思いを伝えること」の必要感を感じることができた。「買い物」は黙っていても行える活動であることから、実際の場面で困ったり要求されることが殆どないので、本単元の学習では「分かるように」話さなければいけないことに気づいた段階であり、それを生活の中に生かしていくことは十分行えなかった。しかし、このような自分を振り返る活動を繰り返すことにより「自分を知る力」を養っていけると考える。

今後も、生徒たちの抱えている課題に即した活動内容を精選し、指導にあたりたい。そして目前にせまった卒業後の生活がより豊かに送れるよう、生かし使えるコミュニケーションの力を向上させていきたい。　　（木下）

店員に質問をするE男

〈奉仕活動における実践〉　～２年生の取り組み～

(1)　生徒の実態

本学級の生徒は、男子４名、女子４名、計８名である。障害は、自閉的傾向、言語障害、脳性麻痺後遺症、ダウン症候群と多様であり、Ｓ－Ｍ社会能力検査で３歳から11歳と幅がある。比較的指示もよく通り、黙々と諸活動に取り組むことのできる学級である。反面、全般に消極的で指示待ちをする傾向が強い。従って、自分たちで話し合ってものごとを決めることが未熟で、話し合いが成立しないことが多い。

(2)　ね　ら　い

学校生活全般を通して、自分に「できること」「できないこと」「援助を必要とすること」等々を明確にし、どうすればよいのかを考える習慣づけを図っているが、一方で「できないこと」に捕らわれ自信をなくすことも考えられる。従って、個別には難しくても、学級という集団を使って、集団の特性や長所を社会の中で生かすことはできないかと考えた。

本学級は全体におとなしいものの、指示にある程度従え、協力して活動できるという特性を持っている。また、昨年度より奉仕活動として校内の清掃活動に取り組んできた経緯から、先ず「清掃という奉仕活動を通して社会に関わる」ことができると考えた。

本校の生徒は広範な地域から通学してきており、その障害からも居住地域との結び付きが殆どない者が多い。従って、地域の人との関わりが持てず、学校と家庭の中で過ごす時間が大半を占める。生徒たちに地域の人たちとの関わりを経験させるために、地域施設への奉仕活動をする中から、さらにより学校周辺の地域に進出し、その地域へ働きかけることができるかどうかを模索させていきたい。

自分たちに「できること」を通して社会に積極的に働きかけ、その行為を周囲に認められ、感謝を受けることで、社会参加への意欲や自信を育てることができると考え本単元を設定した。

(3)　指導方針と手だて

指示を待って「やらされている奉仕活動」から、自分たちで積極的に関わっていく「自分たちの奉仕活動」になるよう、奉仕活動の準備段階から活動の反省をする段階まで、生徒主導の形に持っていく。そのために、繰り返し定期的に奉仕活動を計画し、見通しをもてるようにする。そして、「清掃活動」としての奉仕活動については、将来的には相手施設との打ち合わせや計画段階まで生徒が担当できるように指導していく。

地域施設への清掃奉仕と並行して、学校のある堀越地区へ「牛乳パックの回収」の呼びかけをし地域の人たちへの直接的な働きかけをさせる。この内容については、計画、準備段階で課題学習との連携を重視し、生徒一人ひとりの課題をさらに明確にして取り組ませる。

奉仕活動の年間計画

4　　月	5月～10月	11　　月	12月～２月	3　　月
奉仕活動（清掃） 対象施設の選定	施設への清掃奉仕 ＊若草学園（精神	堀越地区への牛乳	牛乳パック回収 →	→

下見	薄弱児通園施設） ＊敬生寮（養護老人ホーム）	パック回収の計画、協力要請		堀越地区への回収報告 地区公園の遊具のペンキ塗り

(4) 実 践 例

① 施設への清掃奉仕活動

校外での奉仕活動をした経験が全くない生徒たちであるが、生徒たちの主体性を持たせるために先ず本学級の特性や長所を知らせ、その上で清掃奉仕活動の対象施設を生徒たちに選定させた。学校周辺の公共施設（保育所・幼稚園、学校、福祉施設、医療施設等）を利用対象年令の順に従って紹介した。生徒たちはそれら19施設の内、精神薄弱児通園施設の「若草学園」と養護老人ホームの「敬生寮」の２施設を奉仕活動先に選んだ。

次に、実際に相手施設を下見し、奉仕活動ができそうな作業を考えると同時に、施設を利用する人たちの活動を妨げないよう配慮する必要があることを話し合った。その結果、若草学園では「草取り作業」、敬生寮では「窓拭き作業」を中心に行うことになった。

a 若草学園での奉仕活動の取り組み

草取り作業に必要な用具を話し合い準備する。足りない物があっても、自分たちが実際に活動をしていくうちに気づいていくようにさせた。用具の運搬は生徒たちに任せ、その分担についても生徒たちの自主性に任せるようにした。従って、教師が指示を与える場面は、基本的には作業場所の選定、分担と作業終了である。

若草学園での草取り作業

若草学園の先生方に「ありがとうございます。」「こんにちは。」と挨拶されても戸惑う生徒が大半で、適切なやりとりは難しい実態であった。園児からの働きかけにも、どう対処してよいのか分からず黙々と作業していた。若草学園に慣れるに従って挨拶はできるようになってきてはいるが、ことばでのやりとりのコミュニケーション場面は少ない。

b 敬生寮での奉仕活動の取り組み

敬生寮での窓拭き作業

窓拭き作業に必要な用具の準備、運搬については若草学園における取り組みと同様であるが、被服の学習の中で敬生寮での窓拭き作業を意識させて「雑巾づくり」を行った。

窓拭き作業を生活棟の廊下で行うことから、入所者の老人や職員の方々の生徒たちへのことばによる働きかけが多い。「ごくろうさんです。」「大変ですね。」「どうもありがとうございます。」「外側を拭いて下さい。」等々の声かけに対して、最初は照れ臭そうにするだけで、殆どの生徒が挨拶を返すこともでき

なかった。奉仕作業の活動回数が増えるに従って「こんにちは。」「どういたしまして。」と応えられるようになってきた。

若草学園と敬生寮への奉仕活動がそれぞれ3回を数えた段階で、奉仕活動への取り組みにより主体性を持たせるために、生徒個々に自分の関わりたい施設や今後の取り組みについて話し合いを持った。その結果、施設への清掃奉仕は今後も続けること、自分の行きたい施設にこれからも奉仕作業に出向くことが決まった。施設選定の理由は個別に異なるが、作業の後の自分自身の充実感や作業の必要性に触れた生徒が多かった。

② 堀越地区での奉仕活動～牛乳パック回収～

児童生徒会の取り組みの中で、給食後の牛乳パック回収の活動が行われている。本学級の生徒の中には児童生徒会の役員もおり、牛乳パック回収作業は比較的身近な活動であった。そこで、学校周辺の地域に協力を要請し、牛乳パックの回収を通して地域の人たちと直接関わっていく機会を持つことにした。

課題学習の題材にも取り入れ、計画段階から生徒たちに取り組ませるようにした。その結果、課題学習との連携の中から、回収業者との打ち合わせ、牛乳パック回収のチラシ作りや各家庭へのチラシ配布、回収作業の分担と生徒たちの手で進められていった。

各家庭にチラシを配る

100軒近い堀越地区に牛乳パック回収のチラシを配り、協力をお願いして回ったが、生徒たちは予想以上に嬉々として取り組んでいた。「こんにちは。」「附属養護学校の高等部2年生です。」「牛乳パック回収をしますのでご協力をお願いします。」以上のことばを使うように簡単に指導し、最初は友だちの代表が挨拶をする様子を全員で見た。後は二人一組になって各家庭を自主的に回らせていったが、中には「これを読んでください。」とチラシを出して相手の質問に答える形を採った生徒もあった。大きな声で挨拶ができる生徒もあるが、質問にきちんと答えられず立ち往生する場面も見られた。牛乳パック回収の取り組みはまだ始めたばかりで、果たして協力が得られるのかどうか、また、この後に計画している堀越地区公園の遊具のペンキ塗りの費用が、牛乳パック回収金で出るかどうか予測は立たないが、現段階での生徒たちは地域に関わっていくことを楽しんでいる。

(5) 考察と今後の課題

自分たちにできることを通して社会に積極的に関わっていく経験が、生徒たちの社会参加への意欲を高めるのではないかと考えて取り組んだ奉仕活動である。奉仕活動の中にはいろいろな人とのコミュニケーション場面がふんだんに組み込まれている。具体的な作業を媒介にすることで、生徒たちが苦手とするコミュニケーション場面ですら、慣れるに従って自信を持ち始めているようである。このような経験が日々の生活にどのように生かし育まれていくか、具体的に形に表われないものであるだけに、この取り組みの是非も含めて検討を重ねながら、今後も継続していきたいと考える。　（白水）

〈現場実習における実践〉　～３年生の取り組み～

(1)　生徒の実態

高等部３年生は、男子４名、女子４名、計８名のクラスであり、障害はてんかん、自閉症、ダウン症、など様々である。Ｓ－Ｍ社会能力検査でみると２～10才程度であり、発達年齢の差は大きい。言葉による表現、文字による表現が難しい生徒が約半数以上いるため生徒主体の話し合いが成り立ちにくい。故に、生徒の気持ちの表れをじっくり待つ教師の姿勢が大切であるが、時には教師が生徒の言いたいことや思いなどを読み取って代弁する等の手だてが必要となる学級集団である。また、一斉学習だけでは効果があがりにくいため、１時間の授業の中でも、個に応じた課題や教材を工夫したり動きのある学習を組み入れたりすることが大切であると考える。

(2)　ね　ら　い

・卒業後の進路を意識して、現場実習先で働こうとする意欲や態度を育てる。

・現場実習の目標を明確にし、達成しようとする気持ちを持たせる。

・自己評価を重視し、反省点を日常の生活や学習に生かす実践力を身につけさせる。

(3)　指導の方針と手だて

どの生徒も、卒業後は事業所や作業所で働くことを希望（親の希望を含む）しており、６月に３週間、10月に２週間、現場実習を行うことになっている。社会参加を目前に控えた高等部３年生にとって、生活一般「現場実習」は、社会性、協調性を育て社会的自立の基礎となる力を培ううえで今までよりも更に大きな意味を持つ学習であるといえる。より具体的でかつ個々の生徒が課題としている点にアプローチできる学習内容を選び、下記のような学習計画を立てて取り組むこととした。また、個々の課題という点からも課題学習と関連性を持たせながら進めていった。

《生活一般「現場実習」指導計画》

６月　（21時間）	
１．働くこと	(2)
２．健康なからだ	(1)
３．実習先の確認と日誌作り	(2)
４．通勤方法の確認	(2)
５．服装、持ち物の確認、挨拶や返事の仕方	(4)
６．礼儀作法、職場のルール	(1)
７．実習先への挨拶	(1)
８．実習の目標立て	(1)

⇩

現場実習　（３週間）

⇩

１．反省文を書く。	(2)
２．自己評価や実習先での評価をもとに次の目標作り	(2)
３．礼状書きと郵便局での投函	(3)

10月　（14時間）	
１．働く生活を営む上で大切なこと	(2)
２．校内職業実習の反省	(1)
３．生活点検表の記入をし、日常化する	(2)
４．現場実習先、通勤方法等の確認	(1)
５．持ち物、服装の確認	(1)
６．返事の仕方、挨拶の仕方、報告の仕方	(1)
７．６月の反省をもとに課題の再確認と、具体目標の設定	(2)

⇩

現場実習　（２週間）

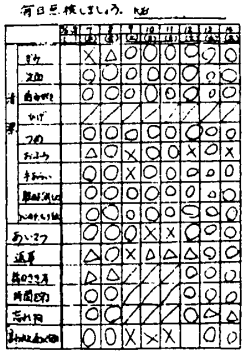
⇩

１．現場実習の反省と自己評価	(2)
２．実際の評価と自己評価とをてらし合わせ今後の課題を考える	(1)
３．礼状を書く	(1)

(4) 実　践　例

① 「働く」ために必要な基本的ルールを身につけさせるための実践例（事前学習）

身辺処理の力や対人関係を処理する力を身につけさせる指導は継続して行ってきているが、まだ不十分な生徒も多い。6月に事前に学習したにもかかわらず、現場実習中に汚れたりしわになったりした制服を平気で着ていたり、名前をよばれても返事ができなかったりという実態が見られた。自分で身だしなみに気をつけさせること、対人関係の基本である挨拶や返事のしかたを身につけさせることをねらいとして、事前事後を通して生活点検表を記入し、日常生活での実践化を図った。

手　だ　て	生　徒　の　様　子
・鏡を見て、あるいは隣どうしで身だしなみの点検をさせる。 ・点検表に記入させる。一項目ずつ実際に確認しながら記入。 ・挨拶、返事など一日の生活を振り返り、○×を記入させる。 ・M男、K子についてはその場で呼びかけて返事を確認する。 ・身だしなみは登校前に自分で点検し、その他の項目は帰りの会で教師と共に点検の約束をする。 	・「髪が短いのでブラシをかけていない。」という声あり。 ・3日に1回風呂に入るというL子・N男には、1日おきに入ることを約束した。その後2日に1回のペースは守れている。 ・汚れたり破れたりした制服を着ていたJ子・I子は次の日にはきれいにしていた。 ・O男は友だちに朝の挨拶をしておらず、指摘されて渋々×を書き込んだ。 ・始業時刻が守れた。 ・ほとんど毎日忘れずに点検表に記入をしてきていた。

身だしなみに気をつけるようになったり、時間を守れるようになったりと、効果のあった項目もあるが、現場実習中に忘れ物をしたり、指導者の指示に従えなかったりした実態も見られた。

今後も日常生活の中で一人ひとりの生徒について項目を絞って継続指導していく必要性を感じた。

② 自己評価を大切にし、自分の課題に迫らせるための工夫をした実践例（事前学習）

現場実習の直前に、働く意欲の高揚や態度づくりを目的とした校内職業実習を行った。紙工、トランス、ボールペン、の3班に分かれて取り組んだが、それぞれの生徒の成長の姿が見えたり、反面、課題が明確になった実習でもあった。実習後に自分で振り返って、あるいは教師に指摘されて反省した点をしっかり話し合い、6月の反省も生かして10月の現場実習の目標をたてた。生徒の以下の生の声から問題点を正しく捉え、目標を立てる際に反省を生かした様子がうかがえる。

校内職業実習の反省		現場実習の目標
J子－後始末や準備をしませんでした。手をたたいたりよそ見をしたりしました。 I子－おそいが悪いです。はやくしました。 N男－ボールペンを多く持ちすぎたので、先生に注意されて減らしました。 M男－声をだしたりして人に迷惑をかけました。 L男－気を抜いて仕事をしました。仕事が遅いと言われました。	➡	J子－作業を続けてがんばる。掃除をがんばる。言われたとおりに作業する。 I子－速く仕事をする。あきらめずにがんばる。 N男－えらくても休まない。（6月は欠勤2日）わからなかったら聞く。 M男－手をなめない。静かに仕事をする。 L男－仕事中に、気を抜かない。忘れ物や遅刻をしない。

このことからも自信がなくて、自分の気持ち等を言葉に出して表現できない生徒が、「おそいが悪いです。」と自分で答えたこと、自分の欠点を言われるのをいやがる生徒が職業実習の反省点を自分なりに把握しており、適切な目標をたてられたことが成果としてあげられる。

③　現場実習終了後の自己評価について

現場実習では、それぞれの実習先で作業を継続的に体験する中で、働くリズムを体得させ社会的自立に必要な社会性や協調性を身につけさせることをねらいとしている。

現場実習中の様子

８名の生徒たちは１事業所、７作業所でそれぞれ実習をした。６月に行ったという慣れから、だいたいの生徒が仕事場面で落ち着いて実習に参加できており、目標達成に近づいた成果もあったが、反面甘えが出て対人関係で失敗した生徒もいた。

現場実習終了後、評価表の15項目についてまず自己評価をつけた。それと実習先からもらった評価とを照合し、課題とする点を自分なりに捉えさせることをねらった。また、まだその段階に至っていない生徒については、教師が良い点・改善すべき点を代弁するという形をとった。

	項　　目	
1	遅刻をしない	○
2	「おはようございます」が言える	○
3	わからない時には、たずねる	△
4	失敗した時には、素直にあやまる	○
5	敬語を使って、話ができる	△
6	仕事中には、雑談・よそ見等をしない	○
7	「はい」と元気よく返事ができる	○
8	仕事中に、作業場を離れない	○
9	禁じられた行為をしない	○
10	根気よく仕事をすることができる	○
11	正確で丁寧に仕事を行う	○
12	仕事の終了を報告し、次の指示を仰ぐ	○
13	職場の人達と話の仲間になれる	○
14	仕事後の後始末や掃除ができる	○
15	帰りの挨拶ができる	○

自己評価表

	項　　目	13日	14日	15日	16日	18日	19日
1	遅刻をしない	○	○	○	○	○	○
2	「おはようございます」が言える	△	△	△	△	△	○
3	わからない時には、たずねる	×	×	△	△	△	×
4	失敗した時には、素直にあやまる	△	△	△	△	△	△
5	敬語を使って、話ができる	△	△	△	△	△	△
6	仕事中には、雑談・よそ見等をしない	○	○	○	○	○	×
7	「はい」と元気よく返事ができる	△	△	△	△	○	○
8	仕事中に、作業場を離れない	○	○	○	○	○	○
9	禁じられた行為をしない	△	△	△	○	○	△
10	根気よく仕事をすることができる	○	○	○	○	○	△
11	正確で丁寧に仕事を行う	△	△	△	△	△	△
12	仕事の終了を報告し、次の指示を仰ぐ	△	△	△	△	△	△
13	職場の人達と話の仲間になれる	△	△	△	△	○	○
14	仕事後の後始末や掃除ができる	×	×	△	△	○	○
15	帰りの挨拶ができる	△	△	△	△	○	○

作業所からもらった評価表

左表はＮ男の自己評価の表であり右側は作業所でつけてもらった評価表である。「注意されなかったので」自分は良い点をつけてもらっていると錯覚しており、自己評価が甘い。しかし、照合することによって自分の見方が甘いという事実に気づいたといえる。Ｏ男は言語理解がしにくいという点もあるが、自分ではだいたい○をつけていた。しかし、実際の評価は△と×が多かった。反対にＬ男のように返してもらった評価が○ばかりで「いい具合につけてもらっています」と述べていた生徒もあった。ほとんどが自分ができたことやできなかったことを思い出して正しく振り返ることは難しく、自己評価はやはり点数が甘いといえる。しかし、自分で自分の姿を客観視することは大切であり、社会参加に向けて前向きに課題解決していく力のもととなるので、今後も機会を捉えて取り組んでいきたい。

(5)　考察及び今後の課題

自己認識のめやすとなる評価表の15項目のうち、コミュニケーションに関する内容が８項目あり評価そのものもこの部分の達成度が低いという実態がある。このことからも、社会的自立をする上でコミュニケーションに関わる学習が重要であることが明確になった。今後ともに、より具体的な場面を設定し、生かし使えるコミュニケーションの力の育成を図ることに努力したい。　　（臼田）